

お上に挑戦し、天保の飢饉では民衆を助ける、義賊・固定忠治が出現する土壌も生まれた。

思えば清水の次郎長こと山本良五郎は、文政三（1817）年の生まれ（田口英爾『清水次郎長と明治維新』新人物往来社、2003）で、忠治より10歳年下なだけ。だがこちらは、明治新政府の誕生とともに、権力に巧みに取り入り、剣の達人として名を残す山岡鉄舟や、日露戦争の軍神となる広瀬武夫といった軍人たちとも気脈を通じ、明治二〇年代まで生き延びて、七四歳の生涯をまっとうする。その初期の浪花節調の伝記作家に、東郷元帥の神格化に一枚噛んでいるのも、民衆ヒーローの体制側への取り込まれぶりを如実に物語る逸話といえようか。

ここに悪人たちの明治維新が、くっきりと明暗を分ける。尤も本来公文書からは抹殺さるべき外道ながら、忠治が歴史に名を留め得たのは、当時幕府にあって、川路聖謨、江川英龍とならび称せられた「幕府三兄弟」のひとつ、羽倉外記（1790—1862）が、固定村代官として『赤城録』を残した故だ。

さて滝澤馬琴（1767—1848）の『南総里見八犬伝』は、忠義一徹が鼻につき、その祖本たる『水滸伝』の革命性とは正反対、とは『復曲的』（1992）に至る平岡正明の持論だが、その平岡が清水の次郎長に『水滸伝』を見る屈曲は何だろう。むしろ文化十一（1814）年から天保十三（1842）年まで、二八年間にわたって益々と書き接がれた長大な『八犬伝』こそ、坂東太郎の水流のほとりに、『水滸伝』に俠道・革命精神の格好の舞台を見たのではなかったか。その馬琴の史的想像力と虚実皮膜の間に、忠治の身代わりを演じた神崎友五郎の天保水滸伝から、その子分、勢力富五郎の嘉永水滸伝が現実生まれ落ち、庶民の喝采を浴びる。

*平成一五年六月七日有楽町マリオンでの国際日本文化研究センター講演会における、デヴィッド・ハウエル氏の講演「悪者たちの明治維新」に触発され、当日の司会として発言した内容を敷衍した。なお当日は、井上章一が、続いて「人形に日本を読む」と題して後半の講演を担当した。『八犬伝奇想』の著者、小谷野敦が近著『性と愛の日本語講座』でも称賛した学者です。

幕末水滸伝異聞

利根川水系の無法者の想像力復権のために

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員、総合研究大学院大学助教

「此頃近在所々江、浪人又者無宿跡之もの共徘徊いたし、無心ケ間敷候儀等申掛ケ」云々という文面が、万延二（1861）年の「浪人捕押方御沙汰書」（千葉県文書館）に見られる。つづけて「手二余り候儀も候ハバ打捨候も不苦候」と、浪人者や無宿の狼藉あらば、それを手打ちにしてもよい——などという物騒なお触れ書きだ。裏を返せば、お上にはこうした狼藉者を自ら取り押さえるだけの警察力がなかったらしい実態も、透けて見える。幕末の關八州には、そんな無法地帯さながらの光景が広がり、自警団は状況次第で、容易に暴力団へと変身した。

すこし時代を溯ると、思い出されるのは、固定忠治こと長岡忠治郎だろう。忠治は嘉永三（1850）年に際で処刑される。ときに四一歳とすると、逆算で文化七（1810）年の生まれ。「赤城の山も今宵限り」の赤城山麓、東西に足利と前橋とを結ぶ利根川水系のあずま道周辺と、南北に日光例幣街道との交差する一帯が、その活躍を支援する「盗区」だった。坂東太郎、利根川水系は一九世紀に入るや、桑の育成に適した土地柄から養蚕業が発達し、これが貨幣の流通を促進するとともに、米の石高に頼った税制からは遊離した経済基盤を形作る。加えて關八州は、小規模な旗本、天領などが複雑に入り組んでいて、統一した公権力が存在せず、悪党の巣窟ともなりやすい格好の地盤だった（高橋敏『固定忠治』〔岩波新書685〕）。

すでに文化二（1805）年には、幕府は治安悪化に鑑み、關東取締出役を選抜し、警察活動の強化を目指していた。さらに文政十（1827）年には、天領、私領の区別なく、すべての村を対象として改革組合村の編成を命じ、出役業務の末端に組み込んだ。無宿や博徒の跋扈跋扈を取り締まる必要からの施策だが、これまた裏を返せば、治安維持強化の実態が露呈する。幕府は、地場の顔役を宿役人などに取り立てることなくしては、公権力を発揮できない有り様だったわけだ。だが在郷の顔役は、裏ではほかならぬ無宿や博徒とも一脈を通じた存在である。《博徒がほかならぬお上の手先となって十手をあずかる「二足草鞋」》。その癒着による権力の腐敗が、村落を庇護することから収奪に加担し、侠客の義憤を招く。ここに、